

恋人はスナイパー
エピソード3への道
- アヴェマリア編 (後編)

6

コー・村木は、次の指示をだした。面子を潰されたままにはしておかない。

「少しは反撃させてくれよ」

自虐的に微笑んだ。

「日本人とは、もう組まない。ドジな奴ばかりだ」

吐き捨てるように、李が言った。小さな畏が、彼の首にかかっていた。

国際二課の男性陣は、傷だらけになりながらも、チンピラたちを逮捕した。きなこはひたすら謝った。

「いいよ、いいよ。円道寺君には、いつもがんばってもらっているんだから」

と、笑顔で言ってくれたが、船木だけは厳しい顔をしていた。あの日は、情報も間違っていたし、きなこは仕事を放棄してしまうし、日本の警察にいいところはなかった。彼もまた、「面子」にこだわっていたのかもしれない。

「本当に埃がでた。お前もチームの連中と一緒に行ってくれ」

李は凱歌に拳銃を渡した。

国際課が捕まえてきたチンピラから、有力な情報をつかんだ。中国語でまくしたてる彼らから、ぼろりとおぼれおちたのだ。もちろん、日本側には伝えていない。

「大きな取り引きがあるらしい。ヤツら、米軍基地に、お得意さんを作ったんだ」

「アメリカ？それは本当なのか？」

凱歌は首を傾げた。

「金が尽きてきているんだろう。ガツガツと、でかいところに食らいついているのさ」

「金か・・・」

そんなものに振り回されている、憐れな手負いの組織（連中）だ。

「リーダーに従って、あくまでも1つの駒として動くんだぞ」

李は念を押した。

なのに・・・リーダーの「前進せよ」という命令を受けた凱歌は、後ろへ下がって行ってしまった。

「(中) ちっ！だから、嫌だったんだ」

リーダーは苦々しく吐き捨てた。

凱歌の遺体を運ぶ時、軍用車を運転したのは彼だった。722号が王凱歌であることを、彼だけは李から教えられていた。

「リハビリ程度に」と、凱歌の訓練を頼まれた。「凄腕の殺し屋」という者の力も見てみたかったから、快く引き受けた。

射撃では声もでなかった。

それでも、

「やはり、少しづれる」

と、凱歌は不満の声を漏らした。

拳法での手合わせは、チームの中でも自他共に認める、少林拳の使い手が選ばれた。いざ始まると、そこにいた全員が目を見張った。一言で言うと「美しい」。まるで川が流れるように拳を繰りだし、滝のような激しさと蹴りを入れてくる。基礎は軍で学んだのだろうが、そこへ実戦での経験が加わったのだろう。凱歌の圧勝だった。

これだけだったら、頼もしい仲間として、リーダーは喜んで彼を迎えたかもしれない。そうできなかったのは、彼が、リーダーの特等席である「李の隣」に座ったからである。1211が標的であるとしても、李が凱歌を頼りにしてひそひそと相談しているのは、我慢がならなかった。

「様子がおかしい」と進言した凱歌を無視して、リーダーは取り引き現場を抑えるため、チームを率いて廃工場へと進んで行った。工場ゆえに、住宅地からは離れていた。雑草も生え放題、そこで扱っていたらしい部品が、錆びてあちこちに転がっていた。

数日前から身を潜め、工場を見張っていた。今夜になって、やっと連中が動き出したのだ。工場を取り囲むようにして、チームは近づいて行った。

凱歌は、それとは反対側へ、慎重に身を隠しながら進んで行った。案の定、1211はいた。外側からゆっくりと李のチームを包囲し、距離を縮めていた。

彼らはもっと前から辛抱強く、ここで待っていた。息を潜め、景色と一体化していたのだ。中には、迷彩服を着込んだ戦争気取りの米兵（崩れか）もいる。

（米軍基地との取り引きって、このことじゃないのか）

凱歌は、すっと立ち上がった。チームを救うには、自分が囷になるしかなかった。

「(中)ここだ！」

1211は突然現れた男に驚きながらも、向かって来た。さすがに米兵は、戦争の経験があるのだろう、対処が速かった。いきなり撃ってきたのだ。凱歌がよけると、1211の1人に当たった。

凱歌が反撃にでる。急所をはずして、次々と敵を倒していった。体力を温存するため確実に。しかし、きりが無い。

米兵がまた撃ってくる。1211が倒れる。

米兵が撃つ。1211が倒れる。

1211もさすがにうんざりして、米兵を敵とみなした。米兵は銃を彼らに向けた。と、彼が気を失って倒れてしまった。その後ろからぬっと現れたのは、沖浦島で戦った小男だ。うれしいことに、彼は例によって刀を2振り、持っていた。刀をふりかざして突進してきたところを、すらりとかわして後ろへまわり、それを奪った。小男はいきなり刀がなくなったので、驚いていた。

刀を得た凱歌は、華麗に、舞うようにして、1211の男たちの足をなぎ払った。刃は月の光を受けて、妖しく輝いた。

工場の方で爆発が起こった。叫び声が響く。チームの連中が何人か、爆風で吹っ飛んだ。それを合図に、隠れていた1211の援軍が、銃を手に乗りこんできた。

銃声と悲鳴に焦りを感じながら、凱歌は燃え盛る工場へと急いだ。

その男はまるで、炎の中から現れたようだった。

「へえー。ボスの言ってた通りだ。生きていたんだな、王凱歌！」

「范・・・火清」

范火清は、炎に目を細めながら懐かしそうに言った。

「あの時を思い出すよね、凱歌兄さん。俺が両親を殺した日をさ」

「お前が悪魔になった瞬間だった」

范が宙を飛んで、蹴りを繰り出して来る。

「あんたは、天使のつもりか！」

范の蹴りを避けながら、凱歌はつぶやいた。

「お前と同じさ。悪魔同士の戦いか・・・お似合いだな」

相変わらず、闘争心をむきだしにして向かって来る范に対して、清冽とまで思えるような凱歌の攻撃。

「范は殺し屋には向かない」と、これまで彼と戦ってみて感じていた。「冷酷であること」を、はきちがえているところがある。彼の生きざまの未熟さか・・・。

凱歌、范の蹴りを受け、地面に転がってしまう。すぐさま跳ね起きて、拳を構える。その時にはもう、范は夜空を舞っていた。凱歌も地面を蹴って飛んだ。月が見守る中、2人の男の影が重なる。范の拳をこらえ、凱歌は炎を裂くような拳を范にヒットさせた。

范はたまたま、吹っ飛んだ。そこへ、真っ赤に焼けた瓦礫が崩れてきた。

「しまった！范！ハーン！」

凱歌は痛みをこらえ駆け寄るが、炎の勢いが激しい。范の姿を見つけられない。意識はすべて、彼の生死に注がれた。

銃声を、遠い所で聞いたような気がした。途端に、肩に熱いものが走る。頬をかすり、炎の中に消える弾丸。

凱歌は逃げだした。敵から丸見えだったのだ。

(結局、誰も救えなかった)

虚しい気持ちと弾丸を抱えこんで、凱歌は闇の中を走った。

7

夜もだいぶ更けたというのに、珍しく中華料理店「紅龍」には明りがともっていた。牛田が、厨房で仕込みをしている。そばに立って、雁太郎が見守っている。美智やはなも、楽しそうに覗きこんでいる。

「そろそろ終わりにしようや。後は明日だ」

と、雁太郎が牛田の肩を叩いた。

「そうですね。何か、俺、はしゃいじゃって・・・。遅くまですみません」

牛田はぺこりと頭を下げた。

「子供みたい」

はなが茶化した。そういう彼女も、わくわくした気持ちを抑え切れずにいた。

「本当にうれしいです。警察に押収されていた、ホイさんのノートが返ってきて。これから研究して、ホイさんの味に近づけるようにしなきゃ」

牛田は、テーブルの上に広げられたノートを見た。ホイの性格を表すようなていねいな日本語で、中華料理のレシピが書かれていた。彼が円道寺家にホームステイしていた頃に、まとめられたものだった。

「本当に、ホイさんてば紅龍(うち)のこと、考えていてくれて・・・」

美智は思わず涙ぐんだ。

「信じられない・・・。本当に死んじゃったのかな・・・」

はなの言葉に、一同は口をつぐんだ。また、いつものように暗い雰囲気包まれてしまうことを恐れて、雁太郎がわざと大きな声をだした。

「何だよ、いつまでもめそめそと・・・。ホイさんが心配するだろ」

そうだった・・・。ホイのことをこちらが心配する以上に、彼はいつも自分たちのことを心配してくれていた。1211に襲われた時も、指名手配の身なのに駆けつけて来てくれた。

「じゃ、俺、帰ります」

牛田が、はずした前掛けで、目をごしごしこすりながら言った。

「おう、ご苦労さん」

「いいえ」

「お前のこと、頼りにしているからな」

「親父さん！」

牛田は思わず雁太郎の手をとった。

「親父さんも、働いて下さいよ」

「おっ？おうっ！」

雁太郎は調子よく答えた。こういう時は、あまり当てにならない。牛田はがっくりとした。

牛田が店を出て、美智が鍵をかけようとした時、ガラリと戸が開いて再び彼が顔をだした。

「何？忘れ物？」

「いえ。今、庭の方に人が・・・」

2階の自分の部屋で、きなこはぼんやりと考え事をしていた。射的で凱歌がプレゼントしてくれたぬいぐるみが、こちらを見ている。思わず手に取ると、あの時の彼の笑顔が浮かんでくる。

(階段の踊り場にいた人・・・)

もう1ヶ月以上たつが、気がつくと、その場面を思い出している自分がいた。

「お姉ちゃん」

はなの声が邪魔をした。

「何？泥棒なの？」

階下に降りていったきなこは、縁側のカーテンの隙間から庭の方をのぞいている、父と牛田に声をかけた。

「わからん」

「犬か猫じゃないの」

はなも来て、牛田に言った。

「いいえ。あれは絶対、『人』でした」

牛田はきっぱりと言った。

「母さん、懐中電灯は？」

と、きなこが尋ねるのに、美智が奥から焦って答える。

「こういう時に限って、見つからないのよね」

きなこが待ちきれずに外へ出て行こうとするのを、はなが手を伸ばして止めた。

「危ないじゃない！」

「平気。いっつもね、もっと危ない連中とやりあってんだから」

「えーっ！？そうなの！母さん、聞いた？」

はなが告げ口をするように、懐中電灯を捜索中の美智に声をかけた。

「きなこは、ンもう、女の子なんだから・・・」

母の説教が始まる前に、サンダルをつっかけて庭へ出た。空気がキンと冷え、身も心も引き締まる。

「ね、誰かいるの？出てきなさい！」

刑事の口調で言った。

少し離れた庭木の根元で、黒い影が動いた。そこへ向かって、きなこが蹴りをいれた。サンダルが飛んで、塀の向こうへ消えた。影はその蹴りを、きっちりと防いだ。

「む。お見事」

思わずつぶやくほどに・・・。

今度は拳を繰りだしてみるが、やはり、ことごとく防がれてしまう。

「このっ！！」

と、渾身の力をこめて拳を打ったのと、懐中電灯の光が戦う2人の顔を照らしたのだ。

は、ほぼ同時であった。

「ホイさん!？」

全員で叫んだ。

きなこの拳は、凱歌の顔面、すれすれで止まっていた。

「やっぱり、あなただったのね、あの時、助けてくれたのは」

「きなこさん……」

凱歌の蹴りが、きなこの顔の側面で止まっていた。

「やはり、僕は……ここへ……来てしまった……」

凱歌の体が崩れていく。きなこは慌てて受け止めた。ぬるりとした嫌な感触……手を見た。

「血!？母さん、ばんそうこう!」

凱歌が、ぎゅっときなこにしがみついた。迷子の子供のように。

「追って……来る……」

「追われてるの? 一体、香港警察(あなたたち)は、何を」

李の顔が浮かんだ。

(私たちを信用しないで、自分たちだけで仕掛けたのね。可哀相に)

きなこは凱歌を抱きしめてやった。母親のように。

店の方から外をうかがっていた雁太郎が、茶の間に戻って来た。

「大丈夫だ。怪しい奴はいねえよ」

明るい所で見ると、凱歌の姿は戦場から帰って来た兵士のようなようだった。頬には血が滲んでいるし、火薬や焦げた臭いがした。

「弾がまだ……入ってる……。ナイフを……」

凱歌が手を差し出した。

そんなことを、当たり前のように言うので、

「自分で取るの!? 病院へ行きましょう、ホイさん」

と、美智は青くなった。

「駄目です……。僕は……」

「母さん、用意してくれ。俺がやる」

雁太郎が低い声で言った。

「えー! 大丈夫?」

「なーに、鶏をさばいてんだ。おんなじだろ」

見ていられないと、美智とはな、そして牛田までもが、店の方へと逃げて行った。気丈にも、きなこは父の手伝いをした。

凱歌が拳銃を、ちゃぶ台の上に無造作に置いた。その光景に、父と娘は固まった。気がついて、凱歌は隠すようにそれを、ちゃぶ台の下へ押しやった。

服を脱いだ彼の背中を見て、またもや2人は驚いた。あちこちに古い傷があった。今できたばかりであろう、青あざや擦過傷も。それらの中に弾丸が埋まっていた。そこへ雁太郎が、果物ナイフを入れた。歯を食いしばる凱歌。

「おーい、母さん! ビール、持ってきてくれ」

雁太郎の声で、店にいた者たちはほっと力を抜いた。

「ホイさんも飲んで、今夜はぐっすり眠った方がいい」

それには答えず、服を着た凱歌は拳銃を取った。

「怖いよ。ホイさんじゃないみたい」

はながビールを持ったまま、立ちすくんでいた。その後ろから美智と牛田も、こわごわ覗いている。

「チャン・ホイは死にました」

暗い顔で言うので、皆はますます怖くなった。今、彼の運命は、どのように動いているのだろう。

「朝になったら、出て行きます。ごめんなさい」

と、頭を下げると彼らの横を通り過ぎて、店へと行ってしまった。彼が、とても遠い所へ行ってしまったように感じた。

「きなこ、ホイさんのあの傷を見たか……。体だけじゃない」

雁太郎は、どんと胸を叩いて言った。

「心ん中にも……。傷の数だけ、地獄を見てきたんだ」

きなこは切なくて目を閉じた。

「ホイさん、こんな小さな店でさ、料理を作るのが楽しいって言ってくれた……」

生き生きと厨房で働くホイの姿が浮かぶ。

「もう、俺たちじゃ、笑顔を作ってやれないのかなあ」

美智が凱歌のために、雑炊を作った。ありあわせの野菜とご飯を煮込んで、熱々のところへ溶いた卵をとろりとかけた。

「きなこ。ホイさんに伝えたいこと、ちゃんと言うのよ」

母がそっと、背中を押してくれた。

きなこは食事を店へと運んだ。隅の方で、凱歌が膝を抱えていた。眠っているのだろうか。起こさないように近づいて行く。と、凱歌が素早く銃を向けた。

「！？……きなこさん……か」

「ずいぶん、用心深くなったね」

凱歌は慌てて、銃を引っ込めた。恥ずかしいことだと思った。

「……スイマセン……」

ホイの時の口癖がつい、でてしまった。

「『お、悪い、気にすんなって！』そう言いなさいって、教えたでしょ」

凱歌に食事を差し出す。

「ちゃんと食べて。からだもあつたまるし」

「ありがとう」

ようやく、凱歌がほっとした顔をしたので安心した。きなこは彼の隣に、ぴったりと体をくっつけて座った。彼女の体温が伝わってきて、凱歌はドキドキした。

「家へ来てくれて、うれしかった。頼りにされているのね」

「迷惑をかけてしまった。君の家族には、最初から……」

「誰もそんな風に思っていない。そうそう、レシビのノート、ありがとう。牛田君、張り切ってる。この店もまた、お客でいっぱいになるわ」

きなこは店内を見回した。

席がいっぱいで、行列ができています。そんな光景が見えてきた。母が接客に、てんてこ舞いしている。学校から帰って来たはなが、急いでエプロンを着けている。厨房には父さんと牛田と……ホイの姿が浮かんだが、すぐに消えてしまった。悲しくなって、下を向いてしまう。

「ここでの思い出があったから、どんなことにも耐えられた」

「そう……。もう、思い出になっちゃったのね」

きなこが寂しそうにするので、話題を変えた。

「母さんの具合、どう？」

「うん、順調よ。もうすぐ退院する」

市江が凱歌の死を知った時、どれほど気落ちしたことか。それで、少し退院が遅れたのだ。

「よかった……。きなこさん、お願い、ある」

「何？」

「母さんの幸せを、取り戻してあげたい。あの日、僕が現れる前の・・・」

「大野さんのこと？そう・・・わかった」

「ありがとう・・・それで・・・」

(他にも？もう、ホイさんたら、人の心配ばかりじゃない)

「きなこさん・・・髪、切ったんだね」

「え？」

話をはぐらかしている。きなこは彼の次の言葉を待った。そしてうつむいて、やっと、

「その・・・結婚は・・・？」

と、探るように聞いてきた。この、とつとつとしゃべる、彼の低い声が好きだ。

「ああ、やめたの」

心の中とは裏腹に、あっさりと言った。

「僕と一緒にいたのが、いけなかったんじゃ」

「ううん、そうじゃないの。あなたのせいじゃない」

言い訳を探す。

「ほら、奥様っていうガラじゃないし、おとなしくしてなきゃいけないし、お酒も浴びるほど飲んじゃいけないし・・・」

次から次へと並べてみる。が、

「ああ」

と、凱歌が妙に納得したのには腹がたった。

「こら！ どういう」

「幸せになってほしいんだ、君には」

真面目な顔をして見つめてくる凱歌に、何も言えなくなってしまう。

(自分はちっとも幸せじゃないのに・・・そんなこと言われたって、悲しいよ)

凱歌は言えなかった。

「新しい名と戸籍をやろう」

そんな細い糸にすがって、きなこに「待っていてほしい」とは言えなかった。凱歌は膝の間に顔を埋めてしまった。

きなこは、彼の体を包み込むようにして抱いた。せめて夜が明けるまで、この人を守りたかった。

明け方、かすかに店の戸を叩く音がする。

凱歌は、弾かれたように立ち上がった。おかげで、うとうとしていたきなこは、ぱたりと床に倒れてしまった。

「ンもう！ 立つなら立つって言って！」

「行くよ」

凱歌はもう、きなこを見なかった。

「え？ ちょ、ちょっと」

と、きなこは慌てて彼を追った。不安が霧のように、心の中に広がっていく。

(私、まだ、何も言ってないよ。これじゃ、夢と同じだ)

凱歌が戸を開けた時、李が立っていた。

「生き残ったのは、お前だけだ」

きなこはその言葉に、背筋が凍った。

「どうして、そんな風にしらーっと言えるの？ ホイさんはね」

凱歌が止めた。

「さよなら」

低くつぶやくと、彼と一緒に行ってしまった。通わせていた心を、凱歌に断ち切られたような気がした。

追って店を飛び出したものの、2人の男の背中では彼女を拒絶していた。
「連れてっちゃった……。あの人が……。いやだよ。すごく、いやだ」
不安が彼女を、大きくのみこんでいった。

「ボスからお前にメッセージだ」
李は血染めのメモを渡した。その手が怒りで震えている。
「どこにあったかは、聞かないでくれ」
苦渋の表情を浮かべた。
「『1人で来い』と書いてあるが……」
と、後ろをふり返ると、凱歌はもういなかった。
「本当に、組織には向かないヤツ……」

8

約束の日、凱歌は、コー・村木が指定してきた店を訪れた。
どこかでみたような茶器やら壺……。そして見知った男が、奥で一心不乱に皿を磨いていた。
「おい」
脅かさぬように、低く小さく声をかけたつもりだったが、八雲はひどく脅えた様子でこちらを見た。
「王凱歌！……1人か……？」
「ああ」
「じゃ、案内するよ」
「逃げなかったのか」
「苦労して集めたんだ。置いていけないよ」
まるで、子供を見るような目で、骨董品を眺めた。もう、引っ越す余裕などなかったのである。
「そう……。この前は悪かったな、割ってしまって……」
八雲は驚いて凱歌を見た。

凱歌が八雲の車で連れて来られたのは、高原のはずれの、捨てられたような別荘だった。朽ち落ちている柵。そこにはからまる雑草が、茶色くなっている。濁った池。黒くなった、元は真っ白だったであろう彫像。そのある種の豪華さは、それが、バブル時代に建てられたものであることを物語っていた。

八雲は凱歌を降ろすと、街へと帰って行った。
別荘の扉が開いて、コー・村木が出て来た。
「ようこそ、王凱歌……。おっと、今は722号だったな」
凱歌はゆっくりと、様子を探りながらコーの方へ近づいて行った。
「身辺整理も終わった。こっちも1人だよ」
凱歌はコーの横を通り過ぎて、別荘の中へ入った。その背中へ、
「ロボットみたいな名だな。お前は気に入っているのか」
と、こばかにしたように言った。

明るい病室だった。市江が品の良い和服姿で、荷物をまとめている。その手伝いを、はながしていた。今日は市江の退院の日だ。円道寺家の近くのアパートに、部屋を借りるこ

とができた。

「ごめんなさい、父さんも母さんも来れなくて。この間から急に、お店が忙しくなっちゃって・・・」

「いいんですよ。それよりはなさん、学校は大丈夫なの？」

「ええ、ノートは友達に頼んであるし。親の了承済み」

「そう・・・すみませんね」

市江は本当にすまなそうに言う。

(そんな感じが、ホイさんにそっくりだな)

はなはくすりと笑った。

「あなたのお家には息子共々、すっかりお世話になってしまって・・・」

「ほら、またー。そんなに気を遣うと、体にいけないんですよ。ウチはボランティアオタクなんだから、いいんです」

そこへきなこが入って来た。

「あれ、お姉ちゃん。仕事、いいの？」

きなこは、挨拶もそこそこに、

「お母さん。実は、『ぜひ退院のお手伝いをしたい』と言うかたをお連れしました。」

と、切り出した。市江もはなも、不思議そうな顔をした。

「失礼します」

入って来たのは、大野だった。凱歌の事件により、不正取り引きのことが世間に明るみになった。今は、建設会社の会長の座を降ろされ、すっかり犯罪者扱いだ。

「あ、あなた・・・!？」

市江は、その場から逃げようとした。

「待ってくれ、市江！」

市江の足が止まる。

「帰って来てくれないか。正直言って、参ってる。マスコミやら裁判のことやらで。こんな私を、もう一度、支えてくれないだろうか」

市江は大野を見た。

「でも、私の息子は、あなたの命を奪おうとした・・・」

「こうして生きているじゃないか。刑事さんから聞いたよ。お前の息子は、騙されていたんだ」

可哀相な息子のことを想って、母親はそっと涙を拭った。

「それも、彼は、自分の命で償ったじゃないか」

きなことはなが、顔を見合わせた。市江には、凱歌が生きていることを教えていなかった。どうやって話せばよいというのだろう。いつ死ぬかわからない任務に、ついていくというのに・・・。

「2人で供養しながら、生きていこう」

「あなた・・・。あなたは私の一番辛い時に、手を差し伸べてくださった。今度は私が・・・。それでいいのですか。こんな私で・・・」

大野は市江に近づいて行くと、そっと肩を抱いた。

「ありがとう・・・。さあ、家へ帰ろう」

はなの目が潤んでいる。きなこも微笑んだ。

(ホイさん、安心して。お母さん、幸せになれそうだよ)

別荘に入ると、かびや物が腐った臭いが、鼻をついた。レトルト食品やらカップラーメンの空き容器が、廊下の隅にかためてあった。

「すまないな。人手がなくて散らかしっぱなしだ。金も人も使い果たした。この間のが、最後っ屁よ」

コーが疲れたように笑った。

部屋はすべて、雨戸がびったりと閉じられていた。

(この男も、窓のない部屋にいたのか)

凱歌は、コーが自分と同じ境遇にいるような気がした。

広いリビングルームには、ろうそくが何本も立てられ、炎を揺らしていた。

「電気も止まっていますね……。あの貧しかった子供の頃を思い出すよ」

コーは凱歌に椅子を勧めた。それは豪華だが、ところどころ破れている真っ赤なソファだった。今の1211(コー自身か)を表しているようで、凱歌は胸が詰まった。2人の男は向かい合って座った。

「短い話をしよう。前に『面子』の話をしたよな。客をもてなすのに、借金までしたという、哀れな俺の親の話を。ある時、腕のいい料理人を雇った。宴が終わった後、父は俺の背中から赤ん坊を取り上げ、彼に渡した。彼には妻がいたが、長いこと子供に恵まれなかったらしい。喜んで、賃金の代わりに貰っていった」

凱歌はなぜ彼が、そんな昔話をするのかわからない。

「俺が1211のボスとして、正念場を迎えた時、その子と再会した。弟は素晴らしい射撃の腕と、軍仕込みの拳法を身につけていた」

言葉を切ると、まっすぐに凱歌を見つめて言った。

「まさに、俺を助けるために現れたようだったよ、凱歌」

「まさか……」

「そう。王凱歌、我が弟よ」

「でたらめを言うな！」

思わず、コーの胸倉をつかんだ。コーは笑っている。駄々をこねる幼子を見るように。

「?……アレルギーは……?」

「他人だろ。お前は他人じゃないから」

そして、胸倉をつかんでいる凱歌の手を握りしめた。

「ああ、お前の手、大きくなったな」

凱歌はコーから離れ、ソファにへたりこんだ。頭の中が混乱している。

「本当の母じゃない……僕はもらい子……」

優しい母の笑顔が、遠くへ遠くへ……消えてしまいそうで怖かった。

「お前が1211に入ったのは、偶然じゃなかった。『血』という運命だったんだよ。それを恨むか」

「『恨む』なんてこと、考えたこともない」

コーが、「意外」という顔をする。

「『感謝』してた、母さんに。『生』を与えてくれたことを」

「俺はお前が怖かった。背中赤ん坊の温もりが、俺の弱点だ。お前の死を願ったこともある。だが、やっぱり……」

いつもは流暢なしゃべりで、人を翻弄するコーが珍しく口ごもる。うまく自分の気持ちを伝えられないで、困っている。彼が真実を話してくれたと、凱歌は思った。しかし、それは同時に、裏切り者である自分への制裁なのだと感じた。こんなに残酷な……。

「これから、どうするつもりですか」

コーは驚いて凱歌を見た。

「俺にもお前にも未来なんかない」

「え？」

「俺たちは、あいつの、李飛の面子を傷つけた」

「どういうことですか」

「虎児のボス殺しで……俺たちが見殺しにしたのは、あいつの弟だ」

凱歌はその話をした時の李の声が、震えていたことを思い出した。

「そう……だったのか……」

「弟が殺し屋だったってことになり、閑職に追い込まれたんだ。だが、ヤツは自分と弟の面子のために、真実を追い1211を知った。長い時間をかけて、政府やアジア全域に人脈を作った。こちら以上に・・・な。で、とうとう『王凱歌』というチャンスをつかんだ」
コーが凱歌を睨む。凱歌もまた、鋭い視線を返した。空気が凍った。
次の瞬間、2人同時に床に伏せた。その上を無数の銃弾が、通り過ぎて行く。雨戸に次々と穴があく。ガラスが割れる。壁に銃弾がめり込む。

市江は大野と一緒に、懐かしい我が家の門をくぐった。
「この家も、来月には人手に渡るんだ」
「そうですか・・・。2人で住むには広すぎましたものね」
(そういう女だったな)
大野は、久しぶりに幸せな気持ちで笑った。
応接間では、グランドピアノが持ち主を待っていた。
「お前が帰って来た時、ピアノ(これ)がなかったらがっかりするだろうと思って・・・。
ま、今度の家には置けないのだが・・・」
市江は小さく首をふった。
小さく貧しい家で、幼い凱歌にピアノを弾いてやったことを思い出す。それは壊れかけていて、とてもよい音色とは言えなかったのだが、凱歌はうれしそうに聞いていた。そして何度も、弾いてほしいとねだったものだった。
「母さん・・・また、あの曲を・・・」
あの日の、凱歌の声が聞こえたような気がした。
市江はピアノの前に座ると、「アヴェマリア」を弾き始めた。

別荘を急襲したのはSATだった。
「香港警察の事件、ご存知でしょう。あの犯人が潜んでいます」
と、出動を要請した李。
一緒にいてわかった。
「凱歌はコー・村木を殺せない」
「殺人マシーン」そんなデマを信じて、彼の命を助けた。
「それは、間違いだったかもしれないな。凱歌、お前は信じてくれないかもしれないが、いつのまにか、弟といるような気がしていたんだ。いつも私に反発していた・・・私に背を向けたまま逝ってしまった、弟・・・」

別荘に踏み込んだSATの隊員たちは、わけのわからないうちに、外の池の中へと吹き飛ばされていた。コーが操る気の波が、渦を巻いて隊員たちを襲ったのだ。埃が舞い上がり、あたりは真っ白になった。
その中を平然と歩いて来る人間がいた。李である。
やっと会えた2人の男は、言葉を交わすこともなく、『面子』をかけて決着をつけようとしていた。
李がサッと手を挙げて合図をすると、彼の後方から、横から、雨戸を破り、SATが銃を構えながら現れた。

凱歌は、別の部屋でSATと対峙していた。彼の殺気に向かって、隊員たちは銃を向けていた。こちらの方が圧倒的に有利なのに、冷や汗が背中を伝っていく。
凱歌の方も動けないでいた。そんな状況の中で、母の弾く「アヴェマリア」が聞こえた

ような気がした。不思議と心が落ち着き、どうにか切り抜けられそうな気がした。
複数の銃声がした。それが、張り詰めた空気を撃ち抜いた。凱歌が動いた。一番近くに
いた隊員の銃に手をかけ、それを奪うと彼の頭を殴った。倒れる彼を仲間が支える。輪が
乱れた。銃を彼らに放り、そこを突破口にしてコーの元へと急ぐ。

リビングルームに入ると、李がいた。その足元にコーが倒れている。たった1人の彼に、
大量の銃が向けられていた。

凱歌がコーに駆け寄る。キッと李を睨んで言った。

「知ってたんですね。知ってて、僕に追い詰めさせた・・・」

「国家のためだ」

それだけではないことを、李はわかっていた。「復讐」という言葉が浮かんで、消した。

何か聞こえる。コーの口が微かに動いている。耳を近づけてみると、優しい声で歌を歌
っている。それは日本の子守歌だ。

「凱歌・・・泣いているのか・・・じゃ・・・も・・・一度・・・」

しかし、もう歌うことはなかった。

凱歌はたまらなくなつて、コーを抱きしめた。

「・・・ありがとう・・・兄さん・・・」

李が凱歌に手を伸ばした。

「おいで」

「国は、僕も殺せと言ったんだろ」

伸ばした手がびくっと震えた。

「あなたは、国を裏切れない」

李は手を・・・引っ込めた。

凱歌はコーを静かに寝かせると、立ち上がった。

その顔はとても穏やかだった。

だから、SATも敢えて銃を向けなかった。

「僕はもう、会わなくてはいけない人、すべてに会えたと思う」

「え？」

「あの子の兄さんに、会えてよかった。ずっと、謝りたかった」

凱歌は右手を後ろへまわした。

その動きに狼を感じた。

李が思わず、1歩後ろへ下がる。

SATが一斉に銃を向ける。

凱歌は腰の拳銃を握りしめた。

円道寺家の人たちが、銃を見て怖がったことを思い出す。

拳銃を握った手をはなす。

だが・・・

引き金は引かれた。

すべての銃の・・・。

最後のろうそくの炎が

大きく揺れた。

テーブルの上で、あたたかな炎を揺らしているろうそく。

そこは、いつか、きなこが凱歌を連れてきたレストランバーだ。

楽しそうに話をしているカップルたち。
その顔をろうそくが、柔らかく照らしている。
先ほどから、ピアノが曲を奏でている。
「アヴェマリア」である。
ピアノを弾いている人の、後ろ姿が見える。
と、その人がとちってしまう。
ふりむいたその人はきなこ。
ぺろっと、舌をだして微笑む。
その視線の先には凱歌。
彼もまた、微笑んだ。
幸せそうに・・・。

アヴェマリア編 おわり